

スーダンのチャイナパワー(話題)

著者	土屋 一樹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	43
ページ	1-1
発行年	2007-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005735

話 題

スーダンのチャイナパワー

土屋 一 樹

もう1年半くらい前になりますが、スーダンの首都ハルツームに2週間ほど出張しました。主な目的は中国石油企業のスーダン進出状況に関する調査でしたが、中国企業のガードは堅く、また政府関係機関へのインタビューも予定通り進まず、調査はなかなか捗りませんでした。

スーダンに進出している中国企業は、スーダン南部での石油生産を目的としているため、ハルツーム市内ではほとんど目立ちません。そもそも石油部門は、政治的な思惑も絡むためか外部からは実態が不透明なことが多いのですが、特に中国の石油企業は国営企業であり事業内容に関する情報開示に慎重な様子でした。

結局、2週間足らずの現地調査では芳しい成果は得られなかったのですが、中国の存在感はあちこちで垣間見ることができました。今や世界のどこに行っても溢れている中国製品はもちろんのこと、市内には中華料理店や中国人向けと見られる商店がいくつもあり、またホテルのロビーなどでも中国人をよく見かけました。中華料理店のなかには、個室から中国語のカラオケが聞こえてくる店もあります。その手のお店は、外観からは決して高級店には見えないのですが、店頭のメニューを見ると一皿30ドルくらいが相場のようなものでした。どんなお店なのかと中にいる中国人店員に様子を訊こうにも、アラビア語も英語もほとんど通じず、結局要領を得ないまま、そそくさと退散しました。

ハルツーム市内には、国連職員など外国人目当てと思われるレストランはいくつかあり、そういったところで食事をする結構な値段になるのですが、それにしても一部の中華料理店は強気な価格設定でした。どうやら最近のハルツームでもっとも羽振りのいいのは中国人のようです。中国企業がスーダンに進出し始めてからまだ10年足らずですが、すでにスーダンでもチャイナパワーはいかんとなく発揮されているようでした。



ハルツーム市内の中華料理店

(つちや いちき / 地域研究センター)